地域の自然資源を活用する

特定非営利活動法人　西条自然学校　山本　貴仁

西条自然学校は、愛媛の自然を保全するために、西条市を拠点に自然環境を調べ、伝える活動を行っている。本稿では、西条自然学校の実践の場の一つである石鎚ふれあいの里での活動や自然観察ツアーを通して、地域の自然資源の活用について述べてみたい。

県土の7割を森林が占め、全国第5位の海岸線を有する愛媛県は、サンゴなど亜熱帯性の生き物がみられる宇和海から、亜高山性の植生がみられる石鎚山まで、日本の自然の縮図のような多様な自然環境が存在する。市街地から少し離れれば、水田があり、水路が流れ、自然と日常的に接している。多くの市町でそれぞれの地域の紹介をする際に「豊かな自然に恵まれた」と述べられることも多い。しかし、愛媛県の多くの人が知っている石鎚山であっても、石鎚山がどんな自然で、どんな特徴があるのかを説明できる方は多くはないと思われる。普段目にする身近な自然になると、「豊かな自然」とはいうものの、それを教育や観光の資源と捉えるまでに至ることは少ない。

これまで自然資源の活用では、自然環境の優れた場所に、観光開発という名の下で、アクセスする道路が整備され、多くの人が訪れるようになり、土産物店ができ、一定の経済効果は得られるものの、やがて多くの人が来ることによる様々な問題が生じ、資源であるはずの自然環境に影響を及ぼす事態に至る例が多い。特定の地域に多くの人が集中することでゴミ、トイレ、植物などの盗堀、踏み荒らしなどの問題が生じるが、事前に想定して対策がなされることは少ない。

そうしたこれまでの「自然資源の活用」ではなく、自然環境に配慮した観光のあり方としてエコツーリズムが発展しつつある。エコツーリズムの概念は、環境省によると「自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた」とされる。また、2007年に成立した「エコツーリズム推進法」では、「自然環境の保全」、「観光振興」、「地域振興」、「環境教育の場としての活用」を基本理念としている。しかし、エコツーリズムの捉えられ方として、「観光振興」、「地域振興」のみが強調されることが多い。マスツーリズムから脱却できない旅行会社の新しい商品ではなく、「自然環境の保全」や「保全に責任を持つ」ことを忘れてはならない。自然に負荷を与えたり、過剰に収奪することなく、自然が持続的に保全されることは、長期的には観光資源も保たれることを意味する。

西条自然学校が活動の拠点の一つとする石鎚ふれあいの里は、西条市の山間部、石鎚山の山麓にある。西条市に合併する前は大保木村と呼ばれ、昭和30年代には3,500人もの人が暮らしていた地域である。林業で栄えたが、高度経済成長期以降、木材の価格は下がり、多くの人が山を離れることとなった。昭和48年に加茂川に建設された黒瀬ダムも、多くの人が山を離れるきっかけとなった。現在の人口は200人を下回っている。斜面が急峻なため、稲の栽培がほとんど行われず、焼き畑が行われ、とうきびを用いた食文化など、独特の生活文化が保たれてきた。石鎚ふれあいの里も廃校になった高嶺小学校を活用した宿泊施設である。

写真１　石鎚ふれあいの里

2009年より、石鎚ふれあいの里で活動を始めるにあたり、「自然を知る、暮らしに活かす」というテーマを掲げた。自然を科学として捉えるとともに、生活の中で意識することで、自然がより理解されるのではないかと考えた。それまでにも多くの自然観察会を開催してきたが、見に行く自然ではなく、愛媛で暮らす中で身の回りに存在する自然に意識を向けて欲しいという思いがあった。暮らしに活かす＝衣食住に関わる生活技術、として自然を知るということは、どの植物が食用になるといった知識や、染物、建材や道具に適した樹種についての知識である。古来から人と自然の濃密な関わりの中で引き継がれてきた地域固有の知識や技術であるが、大量生産、大量消費の文化の中で急速に失われつつある。そうした、知識や技術が消えていくことに対し、自然環境が失われることと同様の危機感を抱いている。人が暮らしていくために必要な多くのことは、本来、自分調達し、加工することで成り立っていたが、消費という行為により、成果のみを簡単に手に入れることができるようになった。ものができる過程や仕組みを考えなくなることで人が失うものは大きい。

石鎚ふれあいの里でのプログラムでは、植物の観察会を行いつつ、ヨモギを摘み、団子を作るといった体験教室を行う。参加者は、ヨモギという植物の特徴を知り、多くの植物の中からヨモギを識別すること、薪でお湯を沸かし、ヨモギを茹でるということ、すり鉢と擂り粉木を使うということ、といった様々な自然科学的要素と生活文化的な要素を体験する。当初は地域の方々を講師として開催することを考えたが、地元の方からスタッフが技術を取得し、プログラムとして組み立てて行うこととした。料金をいただいての体験教室であり、教室の展開、安全管理、言葉遣いなど留意すべき点は多い。伝えたいことも大切だが、参加者には快適にプログラムの時間を過ごしていただくことが重要であり、体験しつつ過ごす時間こそが商品であると考えている。

写真２　よもぎ団子教室

新しいプログラムを行う場合には、企画書を作成し、開催時間内の進行、解説する内容などシナリオも作成するようにしている。茶摘みやこんにゃく作りも同様に聞き取りを行い、体験教室のプログラムとした。こんにゃくは芋の栽培、木灰からの灰汁（あく）の抽出も行っているが、教えてくださった方々も高齢のためにやめてしまった。こんにゃく芋に加える灰汁の量など、レシピのない手加減で引き継がれてきた技術を習得するのは容易ではなかったが、体験教室として多くの方に参加いただいている。地域に伝わる作り方を聞き取り、習得し、参加者に伝えることは生活文化の継承にも繋がると考えている。石鎚山麓の生活文化を民俗学の報告書としてではなく、実際に行いながら引き継いでいくのである。

石鎚ふれあいの里では、自然と生活文化を意識した教室を開催しているが、野外でのプログラムも多く行っている。西条市には砂浜、干潟、河川、湧水、水田、石鎚山と多様な自然環境が存在する。こうした自然環境が存在することが、私たちが西条を拠点とする理由でもある。

写真３　干潟の生物調査風景

西条自然学校のスタッフは、鳥・哺乳類、昆虫、植物、海岸動物などの専門分野を持ち、事業や個人の研究テーマとしてそれぞれの自然環境や特定の種の調査を行っている。

調査は一見無機的に見える自然環境を、有機的な資源に変えるため重要な過程である。調査により、地域に生息する生き物やその場所の特徴がより明らかになり、自然への不可も推測することができる。調査の過程で発見した事象や生き物をテーマに、参加者が体験可能なプログラムへと発展させていく。この場合も体験教室と同じく、開催時間内の進行、解説する内容などシナリオを作成する。解説の技術は経験を積み、指摘を受けて修正していく他ないと考えているが、ガイド自身が調査を行うことで、本人が得た発見や感動を伝えることができる。自然解説のガイドはインタープリターと呼ばれることもある。自然の事象を翻訳して伝えるという意味を含むためであるが、知識や感動を流通させるだけではなく、自らがそれらを生産することが重要である。何のためにその教室やイベントを開催するのか、何を伝えるのかも意識しておく必要がある。自然環境を理解することは、難しく不確定なことも多く、誤った知識を伝えてしまう危険性が常に存在する。学会や研究会への参加、学術誌を読み込むことも不可欠である。

写真４　自然観察ガイド

教室やイベントでは、直接的な楽しさや感動のみを求めるのではなく、ガイドは学ぶ過程、仕組みや繋がりを知る、発見する手伝いをするべきであると考えている。解説において、知識を伝えることには賛否があり、感性を重視すべきとの見解もある。西条自然学校では、主な対象を大人としていることもあり、知識を重視している。自然環境を保全することに繋げる場合、正確な知識は必要となる。環境保全活動と称して、コイを放流し、コイヘルペスの発生や底生生物や水草の減少に繋がるような事例は多い。ある生き物を守りたいという思いだけでなく、その生き物にとってどのような生息条件を整えることが守ることに繋がるのかを理解しなければ、実際に保全することには繋がらない。また、野外で行うプログラムでは、参加者から生き物や植物そのものの名前を聞かれる場面が圧倒的に多い。答えたことが記憶されるか否かではなく、聞かれたことに答えられるか否かは解説者への信頼に繋がる。もちろん、小さな子どもたちにとっては、知識より体験や感動が優先する場合もある。

西条自然学校が、大人を対象にしている理由は、地域の自然についてまず大人が知り、そのことを家庭や職場、地域社会などで伝えてもらうことが大切だと考えているからだ。継続的に開催される教室やイベントが理想ではあるが、参加者にとっては、ある日の非日常的な経験である場合も少なくない。自然を保全するための知識は、自己完結でなく伝達され、人の意識を変えなければ効果がない。継続した学びの場としては、月に1回、生き物に関する座学の講座を2004年から開催している。

少人数を対象にし、自然観察会よりも長い時間を過ごす自然観察ツアーでは、2年ほど前から、夜の干潟を歩くツアーを開催している。県下で最大の加茂川河口干潟は、大潮の日には沖合1km ほどまで干潟が広がる。全国的にも広い面積を持つ干潟であるが、知名度は高くない。30年ほど前まではハマグリやアサリなど多くの貝が採れ、多くの人が訪れていたが、それらが見られなくなり、干潟を訪れる人はほとんどいなくなった。夜の干潟を歩くことは、普段は味わえない海底を歩く体験であり、様々な生き物のほか、真っ暗で何もなく、平らな空間にいるという不思議な感覚を味わうことができる。こうしたツアーの発想も、地道な調査やガイドの経験から生まれてくるものだ。

自然観察ツアーの定員はガイド１名につき6 ～ 8名、多くても10名程度としている。山道などでは、踏むことによる路肩の植物への影響があり、安全管理や解説の伝わりやすさも考慮しての定員としている。

地域の自然を活用して、体験教室や自然観察ツアーを開催するには、講師やガイドの存在が欠かせない。「豊

写真５　少人数ならではの絶景も

写真６　雪の森を歩く自然観察ツアー

かな自然」から「ここにしかない、見てほしい自然」に変えるのは講師やガイド自身である。講師やガイドになるには専門知識を持った人が望ましいが、地域で雇用し、養成する方法もある。知識は勉強することで得られるが、自然の見方やその地域に合った保全の考え方を習得するには、議論しつつ経験を積むしかない。ガイドの養成は、事業として継続するか否かにも関わる、自然を資源として活かす場合に最も大切な事である。

こうした活動の形態も常勤、季節労働、ボランティアと様々である。継続した活動を行い発展させるには、常勤スタッフの存在が大きい。組織として情報や技術が集積されることにも繋がる。過疎化が進む山間部の場合では、昼間の労働人口が増えることで、地域の様々な活動への貢献も可能となる。石鎚ふれあいの里で働くスタッフは、地域の清掃や盆踊り、運動会の運営、災害時の活動にも関わっている。地域に自然や生き物に詳しい人が存在することは、人々に生き物への関心も高まり、自然環境の保全に繋がることもある。自然と接する機会の多い地域では、鳥獣害なども含めて、自然や生き物に関する相談が意外に多い。

平成25年度に西条自然学校のスタッフが実施した体験教室は289事業、自然観察会91事業、自然観察ツアー27事業であった。それでも、安定した収入を確保するには厳しい現状である。また、活動によってどの程度自然環境の保全に貢献したかの評価も十分行えていない。より多くの参加者、より多い収入のみを目指したのでは、マスツーリズムが犯した過ちを繰り返すだけである。

知床や小笠原、屋久島などでは多くの事業者が活躍するようになっている。その他の地域でも、地域の自然を見直し、資源として持続的に活用する取り組みが進められている。ガイドを目指す人にとっても、自然を対象に、収入だけでは計ることのできない価値を見いだせれば、挑戦に値する活動だと考えている。

今後も愛媛の恵まれた自然は、まだ賢明に活用できる余地が十分にある。ガイドの存在を介して、体験教室やエコツアーを実施することで、地域の自然資源を活用した地域づくりに貢献できればと考えている。

Profile　山本　貴仁（やまもと　たかひと）

特定非営利活動法人 西条自然学校代表。日本野鳥の会愛媛代表。
1971年今治市玉川町生まれ。愛媛大学大学院農学研究科修了。愛媛県総合科学博物館自然研究科学芸員をへて2009年より石鎚ふれあいの里で活動。専門は地理生態学。共著に石鎚山自然観察ガイドブック、東予地方水生昆虫ハンドブックなど。
西条自然学校　http://saijo-shizen.org